

## ■ 提 言 ■

## 第 54 回日本小児感染症学会総会・学術集会に向けて

楠 原 浩 一

第 54 回日本小児感染症学会総会・学術集会会長／産業医科大学小児科学教室

2003年3月、同年4月下旬に福岡市で開催される予定の第106回日本小児科学会学術集会（会頭：原寿郎・九州大学教授）を前に、事務局長を務めていた私は、同年2月以降、中国から世界に広がりつつあった重症急性呼吸器症候群（SARS）の動向に戦々恐々としていました。海外からの招待者11名の講演がすべて中止となる可能性もあり、Zoomなどのリモート会議システムがない時代でしたので海外のスタジオからの遠隔中継を検討しましたが、膨大な費用から断念せざるを得ませんでした。その後、幸い封じ込めが成功し、日本国内では1例の発生もなく、同学術集会も中国と台湾からの招待講演者3名が来日をキャンセルされた以外は大きな影響を受けませんでした。当時、そのような時期に学術集会を担当するのは大変なことだと感じましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行がパンデミックとなり国内でも感染が拡大した2020年3月以降に予定されていた各種学術集会の関係者の方々の大変さは、その比ではなかったものと思います。パンデミックにあっても、研究成果や臨床経験を持ち寄って議論し医学・医療の発展につなげるという存在意義はいささかも変わらず、学術集会は、流行拡大当初に関係者の方々が苦労して構築されたノウハウの蓄積もあり、Webやハイブリッドなど開催スタイルを変えつつ感染状況に対応しながら継続して開催されています。2003年当時とは隔世の感があります。その中でも感染症関連の学術集会は、COVID-19およびその影響で危機感が薄れつつある他の感染症に関する情報発信の場として

ますます重要性を増しています。

このような中で第54回日本小児感染症学会総会・学術集会を、本年11月5日・6日に福岡市のアクロス福岡で開催させていただくことになりました。学術集会のテーマは「感染と免疫、GlobalとLocal、両輪で拓く小児感染症学の未来」といたしました。2019年末からまたたく間にGlobalに拡大したCOVID-19は、Localなレベルでも社会、人々の生活そして医療・医学をかつてないほど急激に変えました。その中で、ワクチンの開発、接種をきっかけに感染と免疫の密接な結びつきが一般の方々に広く知られるようになりました。また、COVID-19に対峙する中で、医学的知見や診療、感染対策などの面ではGlobalとLocalが双方向性に作用して進歩をもたらすことが再認識されました。本学術集会におきまして、これら2組の両輪の重要性を意識しながら、お互いに得た知見や経験を共有して議論を深め、それをわが国における小児感染症と小児免疫疾患の診療および研究のさらなる向上につなげることができれば幸いです。

プログラムにつきましては、全国のプログラム委員の先生方のすばらしいご提案に基づいて、上記のテーマに沿って、3つの特別講演・招待講演、7つのシンポジウム・ワークショップ、10の教育講演を企画いたしました。また、女性医師の活躍をテーマとする特別企画と「English Session」も行うことになりました。特別講演は細菌のメタゲノム解析の第一人者である九州大学細菌学の林哲也先生にお願いしており、招待講演では、米国

の James E. Crowe Jr. 先生に COVID-19 を含む新興感染症に対するヒトモノクローナル抗体の臨床応用について、韓国の Yun-Kyung Kim 先生にインフルエンザワクチンについてそれぞれお話ししていただく予定です。

昨今の COVID-19 の状況に鑑み、早期の収束が見通せないことから、本学術集会はハイブリッド開催とする方向で準備を進めております。現地会

場では、感染防止対策の徹底に取り組んでまいります。COVID-19 の状況が一刻も早く落ち着き、少しでも多くの方々に福岡にお越しただいて、対面での活発な情報交換や交流が行われることを願っております。多くの皆様のご支援を得て実りある学術集会になることを祈念しております。奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

\* \* \*